

## 詩時評

### 第14回

# 詩は孤独な 呪縛を解放する

松本衆司

『詩的現代』（第二次）二八号を読む。堤美代の「水際で」を引く。

カヤツリ草を裂くと／薄荷水のように／匂うのを知っていましたか／黙って光るのではなく／比喩のように水際で／揺れるのではなく／言葉に出して言ってください／平家ホタルは／平氏一族の象徴なのだと／《見るべき程の事をば見つ》／と言って海に沈んだ平知盛の／直垂の浅葱色の魂の色なのだと／カヤツリ草を裂いてホタルを掬うと／薄荷水の息をしたひとが／根の国から上がってきて／既知のひとつのように／水際で／待っていることを／知っていましたか

宿諾の無い世界をこの詩に感じている。このように読み手の思いを導くものはないだろうか。心が澄み渡る気分だ。

『海鳴り』三一号を読む。詩誌ではないが、編集工房ノアを主宰する澗沢純平の文学への情熱が生み出した詩情あふれる小冊子である。その巻頭に杉山平一の「忘れもの」という詩が紹介されている。転載する。

いま出掛けただばかりです／それは残念でした／いえないえ、ご心配には及びません／主人はすぐ戻って参ります／忘れ物に気づいて／いつも必ず何かを忘れて出掛けるんです／ほれ、ベルが鳴りました／玄関に現れたのは、しかし／郵便屋だった／彼はそのまゝ、帰ってこなかったという

杉山平一の詩を味わっていると、『帝塚山派文学学会「紀要」』を他から頂いた。集中、杉本深由起の「杉山平一先生の思い出」、山田俊幸の「杉山平一と花森安治」など面白く読むことができた。

矢野美佐子詩集『学生竹光』（濳標）を読む。「メダカの日」を引く。

五月の風にふれて／水面は小さくしわをよ

せる／しわの起こした振動に／光が小さくたたまれて／水面に落とされたエサかと思い／メダカが浮かんで唇を寄せる／小さな口から水泡をひとつ吐きだして／ぶいとからだをひるがえす／あたたかくゆるぶ空気に誘われて／鳥やら虫やら忙しく動き回る／気配におびえたりよろこんだり／ホテイアオイの蔭から／出たりひっこんだり／水面からみえることが全ての／メダカの日

集中、五十篇近い、比較的小さな詩が並ぶ。小さなとは、ちょっとした情景に垣間見るいのちの営みという意味だ。だが、人の心も、詩もそこから始まる。

山田兼士詩集『羽の音が告げたこと』（砂子屋書房）を読む。「吉野川幻想」は紀貫之の「吉野川岩波高く行く水の早くぞ人を思ひそめてし」を折り句にして作られている。その冒頭部分を引く。

よしのやまへは近鉄樫原神宮前から／しずかに飛鳥を南下しながら／のぼり坂を下市口まで、次いで東に向かう／がけ下は吉野川、橋を渡り吉野山を訪れた春／わかやまから、この冬、古刹粉河寺を経て／いつもと違う旅をした、JR和歌山線を東へ／はるか南に紀伊山地、北は和泉山脈／なだら

かな線路は紀の川沿いに走る／みなみに九度山をのぞみ県境を越える／たぶん古代の紀氏がたどった川を離れ北上／かの貴之の父祖の地から都に繋がる／くらい吉野口の山中を経て王子まで続く

ここまでで各行の冒頭の一字を連れば「吉野川岩波高く」の歌が綴られる。吉野川に沿う山間の風情がそこはかとなく浮かびあがる。

樋口武二詩集『羈旅記』（詩的現代叢書三七）を読む。「何が、はじまるうとしている」より一部を引く。

窓からの風に眼を覚ますと、私の時間は私のところにあつた。無数の夢見られた生などというのはひとつの思いつきかもしれない。だが、テーブルに置かれたノートをひらけば夥しい文字たちが、いや言葉たちが躍っている（略）

いま私の側頭部で、小さな出来事が起ころうとしているのは間違いない。記憶は、たんなる電気信号にすぎないものなのか私と云う不確かな存在が書き記すことが可能なのは、日常と云うあまりにも卑小な籠をひっくり返す行為の過程、でしかないといいことか。雨のように降りそそぐ間いゝなかで、私は何を選択したかったのか。目

的は、このホテルからの脱出だが、その前に行わなければならないのは、無数の拡散していく（我）を捜すことであつた（略）

この一冊の散文詩集を筆者は（虚ろな時間）と言ひ（悪戯のような時間）或いは（記憶）と言う。様々な角度から生きる実存を見詰めた詩人の自己確認の物語である。

根津真介詩集『否』（土曜美術社）を読む。

「空蟬」を引く。

樹木にとりついて／液を吸っているように見えるが／子供たちに捕まる直前に飛ばす／オシッコ以外は何も蓄えていない／お腹の中は空っぽだ／／いつも空腹を抱えて／一週間だけ生きる／お前たちが標本にしやすいように／線と柄と羽だけでミイラ化している／ある日、生き仏のように地に転がる／／捨つたらそのまま壁に刺してくれ／一年中、蟬殻としてお前たちを見守るだろう／肉を喰ひ、魚を焼き／アイスを頬張る人間の幸せとやらを／飽き足りない生への執着をすら恨んだりせず／「否」の腐臭を嗅ぎながら／時々、ツクツクボウシ／ツクツク法師 ジジジと鳴いてみせる／空蟬のよう

夏の朝のひとつときは切実な風景なのかもしれない。今を生きることが四苦であり八苦である。その個々の生の実存の究極の姿を見届ける目がここにある。

甲田四郎詩集『大森南五丁目行』（土曜美術社）を読む。「大森南五丁目行」を引く。

男が五百円持ってだんご買いにきて／帰ったと思つたらすぐまた来て／だんご五百円買っていく／弟だという男がきて／あれは認知症なんだ食わないんだ／家にだんごがいっぱいたまってるんだ／好きにさせておいてくれ／バスが額に目玉のように／行先表示を点けて発車していく／大森南五丁目行／男が通りを渡ってくるのが見える／額に点けているものはないが／目を上げていく／矜持である／バスは大森南五丁目へ行くが／男の行先はだんご屋で／なぜそう決めたのか／私はいつまでだんご屋なのか／見上げる空は青く／どこまでも青く／私の行先を問うているかのようにだ

読み終わって眼を閉じる。詩の風景が脳裏にくっきりと甦る。ふと思う。甲田四郎ファンはきっと多かるうと。私もその一人だ。残念ながら菓子味はまだ知らないが、詩の妙味にはずっと親しんできた。やはり、大事

なことは、創作の向こうにある。

網谷厚子詩集『水都』（思潮社）を読む。  
「わたしたちは一斉にそよぐ」を引く。

冷たい蜘蛛の巣に絡め取られて データベ  
ーシ化されたわたし 切り取られ 探りあ  
てられ 繋がれ 貼り付けられる そんな  
生き方はしてこなかった そんなものを生  
み出したことはない 恥ずかしさが 悲し  
い佇まいとなって 立体的な影を一層濃く  
する 音のない時空を（略）わたし わ  
たしたちは どこまでも旅する たぶらか  
され いたぶられ しゃぶり尽くされても  
ラムネのようになくなってしまうたくても  
なくならない サーチエンジンの刃から  
逃れることはできない ウェブの熱い息づ  
かい デジタルアーカイブの森で あちこ  
ち小さな穴を掘り 卵を産みつける 海亀  
のように 白い涙を流しながら 拡散し  
微細になっていく わたし わたしたち

私たちは過去と未来の狭間で生きている。  
詩人はその生の一瞬、一滴を言葉にして心の  
湖にためる。誠実な詩人の眼で描出された幾  
つもの現実には頷かざるをえない。

長嶋南子『家があった』（空とぶキリン社）

を読む。「めでたし」を引く。

うとうとしていた／死んでしまえば と声  
がする／わたしが言っている／いちにち誰  
ともしゃべらなかつたら／ことばが口内に  
たまってしまう（略）／生まれてから  
百一年たった母は／ベッドの上でうとうと  
している／誰ともしゃべらず／お尻は紫色  
になって／口内にもたまるのは食べかすばか  
り／おかあさん／きのうあなたの孫に九人  
目のひ孫が生まれました／ますます死人が  
ふえていきます／めでたいことです

一休禪師が孫の生まれた知人にめでたさを  
記念して何か言葉をと、頼まれてこう揮毫し  
た。「祖父父死子死孫死」、これが一番めでた  
いことじゃと。生老病死の命のなかを誰もが  
生きる。「老いの文学」の行方を考える。

『イリプスⅡ』二七の齋藤慎爾の講演録  
「今、詩に求められるもの」を面白く読んだ。  
七九才になれる齋藤氏の出版人生の一端が  
語られている。深夜叢書社のネーミングに触  
れるくだりの一節を引く。

深夜というのは白昼の論理を否とする世界  
です。白昼が憲法・法律を含めて市民社会  
の論理が通用する世界であれば、深夜は反

市民、反日常、矢内原伊作が「二十世紀と  
は夜である。実存とは夜目覚めているもの  
の謂だ」とも言ったように実存そのものに  
触れうる世界です。

二一世紀も二十年になろうとする。人間社  
会はどのように変容したか。改めて、この実  
存という言葉と向き合わねばならないはずだ。  
そして、何に対して「否」と言うべきなのか。

中原道夫詩集『忘れたい、だから伝えた  
い』（土曜美術社）を読む。「血の匂い」の第  
五連以降を引く。

わたしは指を噛む／わたしだけが知る／激  
しい痛みと血の匂い／けれど、この痛み  
と匂いこそ／まだわたしが生きているとい  
う／証してはないのか／一九四番、列を  
乱さず中に入れ！／ナチスの兵士ががむし  
やらに／わたしの背中を押す／シャワー  
室と呼ばれたその部屋は殺戮のためのガス  
室／一瞬、憎悪と怨念だけを残して／わ  
たしの痛みも／血の匂いも消えていった

帯文の引用箇所が恐縮だが、この詩集の思  
いが見事に収斂している詩行だ。この人間の  
愚かさによる現実は今も常に試されている。

愛敬浩「自選詩集『真昼に』（詩的現代叢書）を読む。「乾草」を引く。

束ねる乾草はなく／苦痛の感覚ばかりある  
／束ねる乾草はなく／あたりさわりのない  
言い訳をしている／束ねる乾草はなく  
／魔術師の夢が破れた／束ねる乾草はなく  
／それでも入り日が差している／束ねる  
乾草はなく／一日の終わりにただ行く当  
てもなく歩いている

「束ねる乾草はな」いのだが、その乾草の情景に不思議にも引き込まれていく。詩人として生きることの断章とでも言うべきか。

石川厚志詩集『山の向こうに家はある』（思潮社）を読む。「花見」を引く。

丘のうえの さくらの花を 見にゆけば／  
とうさんと かあさんは 一緒にいれる／  
／と そう 三つになる小猿が／一人おも  
ちやを転がしながら／日曜の朝に 一人言  
をいっている／二歳の春を 覚えている  
のか／まだベビーカーに 乗ってたくせに  
／でも今は とうさんと かあさんは／一  
緒の丘へは ゆけないう／かあさんが先に  
君を連れてゆき／とうさんは一人 後から  
ゆく／／とうさんが来たら 君をバトンタ

ツチだ／ちらちら散る さくらの花びらと  
束の間君が 戯れる間に／かあさんは一人  
帰ってゆく／／気がつくとき 小猿の髪に／  
花びらが一片 とまっている

家族の、或いは夫婦のひとつがさりげなく  
綴られる。心の交流があり、摩擦が生じる。  
その中で人々は熱を感じ、光を求めてともに  
生きるのだ。

三村あきら詩集『楽土へ』（溇標）を読む。  
「暮れの大掃除」を引く。

たんばばが咲いた小道で勝ってくるぞと  
勇ましく／軍歌と日の丸の小旗に送られ  
る／ばんざーいの声援の後ろで／独り農婦  
が叫ぶ「お父さん おとうさん……」／  
魂の叫び声 平成の今も／小道のむこうか  
ら聞こえてくる／／あれから七十余年 愁  
眉をくもらせ／暮れに仏壇の大掃除をすれ  
ば／万華鏡に母の叫び声がよみがえる／お  
父さん・おとうさん の甲高い声／勝  
つてくるぞと勇ましく の声援を消し／負  
んぶされていたわが耳に痛くこびりつく  
／九段の妻を抱めば 母は非国民か／必死  
に母は英霊を抱き 離さなかった／一緒の  
墓に入ると 遺言の詠歌を遺して逝った／  
年の暮れを迎えるたび 遺詠を口ずさみ／

母の温もりに想いをはせる 暮れの大掃除  
積もった思いがあるからこそ、人は人とし  
て生きてきた自身の過去を振り返ることがで  
きる。再生のための原点回帰といえよう。

新延拳「虫を飼ひ慣らす男の告白」（思潮社）を読む。「わが嘔吐」を引く。

大喰らいの猿を飼っている／少々あぶない  
夢でも大丈夫だ／けれどもドアに挟まれて  
しまった夢をとりあえず解放してあげなけ  
ればならない／鏡中の獄吏が私を捕まえ  
に来る／なんとか鏡から脱出したはずなの  
に／私は彼から目を離すことができない／  
呪縛そして戦慄／何かきちんとしたことを  
言わなくてはならない／さあ なんとか  
一本のペンを頼りの杖にしているが／文法  
は贗物／どこの国語でもない／犬が交っ  
ている／鳥が哄笑しながら水平に飛んでゆ  
く／妄想都市の炎上／悪魔も恍惚になるこ  
とがあるのだろうか／寒さが青い髭を引い  
て体を通り過ぎてゆくと／私は過去と地図  
を見失い／詩のようなものを嘔吐し続ける  
追い詰められた人がその呪縛から解放され  
ることを願っている。その解放の手段がここ  
にある、と、この詩をもって提示しよう。詩  
はかくも面白いと、これに尽きると。

前田珈乱詩集『風おどる』（人間社×草原詩社）を読む。「思い出」を引く。

やめて。／全てが嘘で満ちている。／まるで友達の首をね／笑いながらのこぎりで引くような。／セピア色の、思い出なんて許さない。思い出の色は何？／黒に決まっているでしょう？／／そこは夏の夜の底。私は一人道を歩く。車も人もない。／あんなにいい心地。断続する白い電灯、／影を繰り返し踊らす。

詩を書き始める位置は人それぞれであろう。そこからどこまで行けるのか、その距離が尊く、その行程がそれぞれの人の詩なのだろう。

中嶋康雄詩集『うそっぱちかもしれない』（滯標）を読む。「駅舎」を引く。

駅舎が燃えてしまった／電車は止まってしまった／廃線が取り沙汰される路線の／古い木造の駅舎だった／古い古い相合い傘の落書きも燃えてしまった／燃えてしまった／駅の柱に／死んでしまった毛虫が這った／サルノコシカケが生えてきた／（略）／電車が運転を再開した／プレハブの屋根の下に真新しい自動改札機／たったそれだけ／

電車はここどころずっと赤字だった／薄汚れた着物を着た男と女がいた／男は牛を連れていた／男も女もただじつと佇んでいた／男が首を傾げた／女が着物をはだけると／垂れ下がる乳が見えた

諧謔、風刺の効いた詩篇の中にこんな詩があった。朽ちたのは自然ではない。自然はありのまま嘘をつかない。